

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区夢の島3-2  
都立・第五福竜丸展示館内  
電話 (521) 8494

## 広島・第五福竜丸の心象

藤原 弘

一昨年の一二月、「核兵器に反対する経営者の会」(略称・反核経営者の会)を旗揚げしたとき内外からいろいろな反響があった。「なぜ企業経営者が反核運動をやるのか」「いったいどんな効果があるのか」といった疑問や意見も多く寄せられた。

反核経営者の会は、中小企業家を中心として、ひろく日本の経済人が「核兵器に反対する」という一点で結集することを呼びかけ、経営者として核兵器の製造、運搬、貯蔵などにかかわる業務に手を加さないことを誓い合おうではないか、そしてそのために、あらゆる思想、信条、政治的立場をおおらかに乗り越え、経営者らしい創意にみちた活動を、自由闊達に展開しようではないかという趣旨のもとにつくられている。

経営者であろうとなかろうと、核戦争に反対し、核兵器を廃絶することが人間としての責務であることは言うまでもないのだが、加えて経済活動そのものが、本来生活の安定と向上をめざすものであり、それを通じて幸せな

社会を実現しようという性格をもって、以上の、平和なくしては企業の存立そのものが成り立ちえないのである。冒頭から話はかなり理屈っぽくなつたが、まあ、こんなことを話し合つたり訴えたりしながら、いままでも運動をつづけてきた。

会員中の先輩の人たちのなかには身をもってヒロシマを経験したり、東京大空襲で家業をうしなつたりした人もいるし、ヒロシマ・ナガサキのころはまだ生まれていなかったという若手経営者もいて多彩だが、それなりに歯車もうまくかみ合つて進んでいるように思われる。行事もなかなかユニークで、いままでも「反核お花見」、「反核経営者・トークイン東京87」などを成功させてきた。そんな会だから、第五福竜丸丸上げ大会協賛という話が会員からもちこまれたとき、いやおうなく参加がきまり、少々お手伝いできたことをむしろありがたく思っている。

私は敗戦の年の十月、着のみ着のままで外地から引き揚げてきたが、下関から東京までの途中、車窓から見た広

島の「黒い風景」をいまだになまなましく思い出すことができる。それまでは、私も一ぱしの軍国少年だったから正直言つて「敗れた祖国」を残念に思う気持ちもなくはなかったのだが、広島でのショックはそんな思いを吹き飛ばし、その後戦争というものを考え、戦争に反対する行動に私をかり立てる、たしか原点になつたと思う。

人類は確実にあそこで何ものにもかえがたい教訓をえたはずであるのに、その後大団間の核競争はますますはげしくなり、そして第五福竜丸事件。

新聞とラジオでビキに環礁の衝撃的な事件を知った瞬間、私の頭のなかで広島島の黒い景色と太平洋上のキノコ雲が交錯し、言いようのない怒りと悲しみをおさえることができなかった。

原水爆禁止の運動にたえず目を向けてこられたのも、そんな忘れられない心象が支えになっているのかもしれない。

初心忘るべからず。こんど平和協会の評議員を仰せせかつたが、原点ともいうべき広島・第五福竜丸の心象を大切にして経営者層をはじめいろいろな層の多くの人たちに第五福竜丸に目を向けてもらえるよう私なりに力をつくせればと思つている。(水曜社・第五福竜丸平和協会評議員)

## 三・一ビキニ事件記念集会開く

乗組員大石又七氏の話に感銘

「仲間が次々と死んでいくことと事件が無関係と思えない」―元第五福竜丸乗組員の大石又七さんは被災から三四年、体験を語り参加者に大

きな感銘を与えまし  
た。  
三月一日、文京区民センターでひらかれた、第五福竜丸平和協会主催の「三・一ビキニ事件記念集会」は、三宅泰雄会長の主催者あいさつ、大石さんの証言と、服部学(立教大学教授)の「IN F撤廃条約締結後の世界情勢を考える」と題する記念講演、アニメ「核戦争」の上映など多彩。都職労経済支部、都民生協平和活動委



参加者からも大石さんへの質問が続いた

## 武藤宏一氏を偲ぶ

「沈めてよいか第五福竜丸」の投書から今年二十周年。館内には投書の大きなパネルと写真が展示され、「人間のあかしとして船を守る」との願いを、多くの人々が改めてかみしめています。

新聞・雑誌でも紹介され、関心をよんでいます。投書二十周年目の三月十日を前にした日曜日、武藤宏一氏(故人)の真澄夫人、次女美紗さんが来館され、船を見つめ、パネルを前に懇談、カンパを寄せられました。  
武藤氏夫人真澄さんと美紗さん

員会、核戦争防止医師の会、といった新しい顔ぶれも含め約百名が参加しました。

二月十二日、雪が降りしきるなか、展示館前から焼津にむけて日本山妙法寺の平和行進が発せました(写真)。

また三月一日、東京大空襲の悲劇を繰り返すまいと下町反戦実行委員会の青年三十名が展示館に集合、三月十日までの下町平和行進の発せを行いました。

毛糸でできた福竜丸  
三月十三日、文教大学付属高校一年生が、横三メートル、縦二メートルの毛糸の「平和アピール」



久保山さんの碑の前で記念撮影(右端、レスリーさん)

を、展示館に寄贈。図柄はもちろん第五福竜丸。一年生三百五十名全員が参加し、一人十センチの毛糸を編み、青い海に白い船を浮かび上がらせました。女生徒ならではのあたにかいアピールです。

\*

二月十一日、「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」の江口保氏の案内で原爆投下後広島を撮影した米国戦略爆撃調査団のスタッフ(故人)の娘さんレスリーさんが来館。熱心に館内を見学し、第五福竜丸の絵本を英文で是非出版してほしいと、強く要望されました。

久保山さんの碑の前で記念撮影(右端、レスリーさん)

連載「第五福竜丸をとらえる」は、今回はお休みとします。



### 『第五福竜丸物語』のこと

小西 聖一 (フリーライター)

小学館の雑誌(「小学六年生」三月号に掲載されたまんが『第五福竜丸物語』が、関係者のお目にとまったと聞き、いささかとまどいつつ赤面しています。乗組員だった方や保存運動に力を注いでくれた方にとっては、笑止の部分も多いのではないかと冷汗三斗の思いでもあります。

実は私は「沈めてよいか第五福竜丸」の投書の主・武藤宏一さんとは同じ世代の人間であります。第五福竜丸の名前は、当時四国の片田舎に住む中学生の胸にも、強

いショックとともに刻みこまれてきた。今考えてみれば、ある種の怒りをもって世の中の矛盾を見つめた最初の体験であったかもしれませぬ。

生前の武藤さんには一面識もありませんが、同世代のよしみをもって、「私の体験はあの人の体験あの人の体験は私の体験」と、勝手に決めつけてこの仕事を進めたことを、先ず告白しておかなければなりません。

同時に私は一つのショックも体験しました。テレビや出版を通じてさまざまな情報を子どもたちに伝えるという仕事をしていますと彼らの「なぜ?」「どうして?」「どうして?」という素朴な疑問にいつも悩まされま

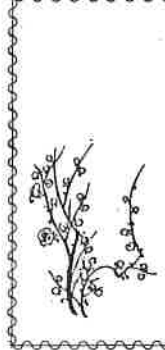


ないもどかしさを抱きつつ、言葉で説明してしまおうとするのは、おとなになってしまった者の悲しくも狡い性であります。しかしこの一年間に今度のシナリオを含めて二度ばかり第五福竜丸と展示館について小さな記事を書く機会があり、何度か展示館へも足を運ぶうちに、私は久しぶりに「なぜ?」「どうして?」という素朴な疑問をもっていたころの自分を思い出してしまいました。同時に第五福竜丸という巨大な存在を前にして、私をもって

「まんがでは保存運動にウエイトがおかれているが……」との質問を受けました。もともと読者が生まれたころの出来事という企画でしたが、「船のことは船に聞け」と腹をくくった結果の筋だてでもあったのです。武藤さんの投書の文章も、読者にはちょっと難しいのですが、大変心をうつものなので是非読んでほしいと思ひ、全文

### 平和随想 (志)

三宅 泰雄



被爆の真相を明らかにすることを目的に開かれる、NGO国際会議の日本準備委員会は、一九七六年末に発足しました。この重要な国際会議を目前にして、私たちが最も心配したのは、一九六三年以来、国内の原水爆禁止運動が分裂していることでした。

このままでは、この重要な会議の円滑な運営は困難であり、国際団体にたいしても、顔向けにならないというのが、私たちの率直な気持ちでした。私たちは、何とかしてこの窮況から脱する道はないかと苦慮しました。その結果、私たちは、世論の良識に訴えて、何とか打開できないだろうかと考えました。

そして、上代たの、中野好夫、藤井日達、吉野源三郎の諸先生と私の五人の名で「広島・長崎アピール」――被爆の実相究明のための国際シンポジウムを前にして――ととも、その解説文として「核廃絶をめざす運動とその展望」を発表することとしました(二月二日)。

この「お願ひ」に対する反響は、文字通り、打てば響く、の感があり、四月の末までには、早くも一七六名の個人、五〇の平和諸団体、二二の労働組合からの圧倒的な支持表明が、事務所に殺到しました。そのすべてに、NGO国際シンポジウムと、翌年の国連軍縮特別総会の重要性と成功、とくに我が国の原水爆禁止運動の再統合を熱望する、大きい期待感が溢れていました。

この私の不安は、数年前に再燃し、いままた、分裂がくりかえされる最悪の事態となつていきます。上述の市民団体も運動から手を引くなり、それぞれ独自の道を歩むようになり、私に言ってきたように、「日本の原水爆禁止運動は、国内の運動にとどまらず、世界の運動の要である」ということを、ここでもう一度、くり返したいと思ひます。

このおかげで、国際シンポジウムも、辛うじて、外国代表に内輪もめの醜態をさらすことなく、開催できるめどが立ちました。

NGO国際シンポジウムの翌年三月には、ジュネーブのNGO軍縮特別委員会に八〇人の統一代表団を、五月から七月にかけての国連軍縮特別総会には、一八〇万人分の原水爆署名をたずさえ、五〇二人の代表団がニューヨークにむかって旅立ったのでした。このときには「NGOデー」に、地婦連の田中里子さんが、日本代表団を代表して、国連総会の席上で演説をしました。さらに、この年から、従来の原水協、原水禁に代わり、NGO国際会議への参加五団体(地婦連、日青協、日生協、宗平協、被団協)の呼びかけで、統一世界大会を開くことになりました。

私は、その年の日本科学者会議定期大会で、この間の経緯を報告しましたが、その最後に「私たちは、この勢いで行けば、統一組織ができるのではないかと考えています。何といたしても、お互いに生き物です。どんなはずみで合意が不意にならぬとは限らないので、皆さん方にも、色々な側面からのご援助をお願いしたいと思ひます」と結んでいます。私は原水協、原水禁の合意形成に、相談役として一役を買っていました。だが、なお、そこに一抹の不安を抱いていたのでした。

